

ミシンの使用状況と衣生活

村田 温子

The Actual Condition of the Sewing Machine and Clothing life

Atsuko MURATA

1 はじめに

日頃着用する婦人、子供服が、家庭制作から外部に依存するようになって久しい。それと相俟ってミシンを家庭では使用しない、所持しないなどが言われている。家庭生活の中でも針を持つことが少なくなり、糸さえ通すことができなくなっている学生が多い中、一般家庭のミシン使用状況はどのようなのか、また、普段着についてはどのように思っているのかを調査することにした。ミシンの使用状況については、1969年に同じような調査をしたのでその結果とも比較して今後の衣生活を考える一助にしたいと考えた。

2 方法

2004年10月 生活科学科および家政科の学生108名を対象に集合一斉アンケート調査を行った。調査内容は、ミシンの有無、ミシンの購入動機、ミシンの使用頻度、制作物、普段着の調達、補修などの対処方法、普段着について、既製服への不満、市場から衣料品がなくなった場合どうするか、Tシャツの値段などである。分析方法は、単純集計、クロス集計、クラスター分析である。

3 結果

ミシンの所有状況は、2004年が86.1%であるのに比して1969年の調査では100%が所有しており、13.4%の低下であった。所有台数は、図1に示すように1台、2台、3台ともに1969年の方が高率であった。2台所有しているものが、1969年では30%近くあったのに対し、2004年では10%に過ぎず、ミシンの所有は減少している。ミシンの種類については図2の通り直線縫いミシンが、両年度とも圧倒的に多いが、科学技術の進歩による時代の反映か1969年にはなかったコンピュー

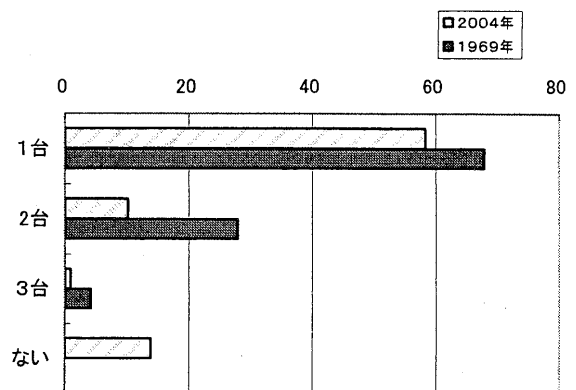


図1 ミシンの所有台数

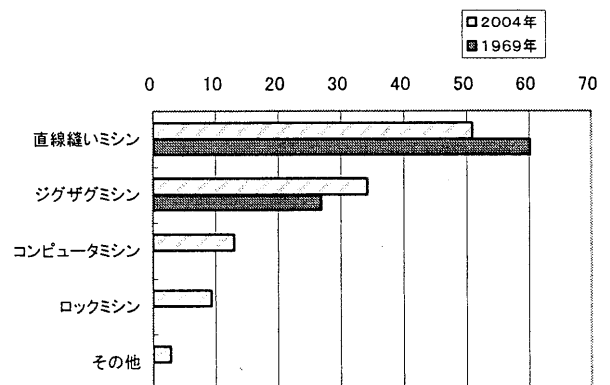


図2 ミシンの種類

タミシン、ロックミシンが2004年には出現した。ジグザグミシンは、1969年当時は花形になりつつあるミシンであったが、全体の約1/4の所有であった。

ミシンの購入動機(図3)は、2004年は1位、何かを制作するため、2位、母、姉などの嫁入り道具、3位、以前のミシンが古くなったからで購入動機の大半を占めた。1969年は1位、何かを制作するため、2位、以前のミシンが古くなったが、ほぼ同率で突出した理由であった。1969年は、母、

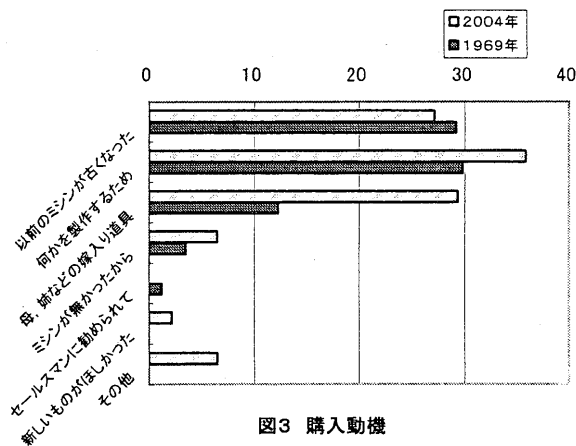


図3 購入動機

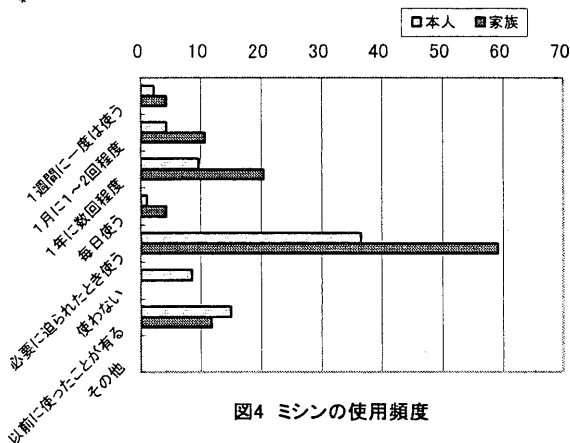


図4 ミシンの使用頻度

姉などの嫁入り道具としての他力的な動機はかなり低率で、自分のためと感じられる積極的な動機が多く、2台目の動機に自分のための購入が40%もあった。2004年には出現していないセールスマンに勧められて、積立金が満期になったという時代を反映した理由が1969年にはあった。

ミシンの使用頻度については図4に示す。本人と本人以外の家族の使用頻度をミシンの所有者を母数にした比率で示した。必要に迫られた時に使うが本人は36.6%、家族が59.1%で、ともに1位であった。2位は本人は以前に使ったことがある15.1%、家族は、1年に数回程度20.4%、3位、本人、1年に数回程度30.1%、家族、以前に使ったことがある11.8%などで使用頻度は少ないといえる。1969年には毎日使うものも5.3%あり、現在は、いかにミシンが使われていないかが窺える。1969年頃には国民生活白書にはミシンの所有率が掲載されていたが、現在は全くないことなどからもミシンが生活の中から消えていることの現われと思われる。ミシンを所有していないもののうち60%はミシンはいらないとしている。

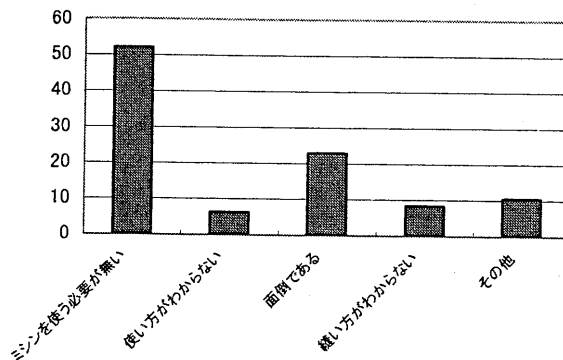


図5 ミシンを使わない理由

ミシンを使わない理由(図5)には、ミシンを使う必要がない52%、面倒である23%などミシンを積極的に使わなくても生活できるということを表している。

制作物についても本人(図では2004年と表示)と本人を除く家族、1969年のものについて示した(図6)。子供服を除けばどの制作物も1969年の方がかなり高率である。1969年には、スカートは70%を越えていたが、2004年では1969年の1/2にも満たない。1969年にはワンピースが73.7%も制作され、ジャケット、コートでさえ28.7%制作されていたが、2004年にはこれらは、皆無である。ほとんどが既製服を利用していることの表れと思われる。本人以外の家族については、本人と同じような傾向であった。雑巾は本人では出現しないが、家族は43.7%で、家事を担っていることの現われであろうと思われる。子供服が唯一、本人、家族ともに1969年より高率になったのは、既製品の氾濫している中、大人のものは既製服で、子供服は手軽に作ってやれる、喜んで着てくれるということなのであろうと思われる。

このようにミシンが使われなくなった状況下、普段着の調達には、どのように行われているのかについて示したのが図7である。既製服で十分間に合うとしているものが80.6%にも達し、さらに、既製服で合わないところがあるが我慢して着るというのも12%あることも含め、ほとんどが既製服を利用している現状となり、制作物と一致した結果であった。自分で制作したり、誰かに作ってもらうなど制作して着るものは皆無である。

ほとんどが既製品に頼っている現状の中、ボタンが取れたり、ほつれた場合など、簡単な補修は

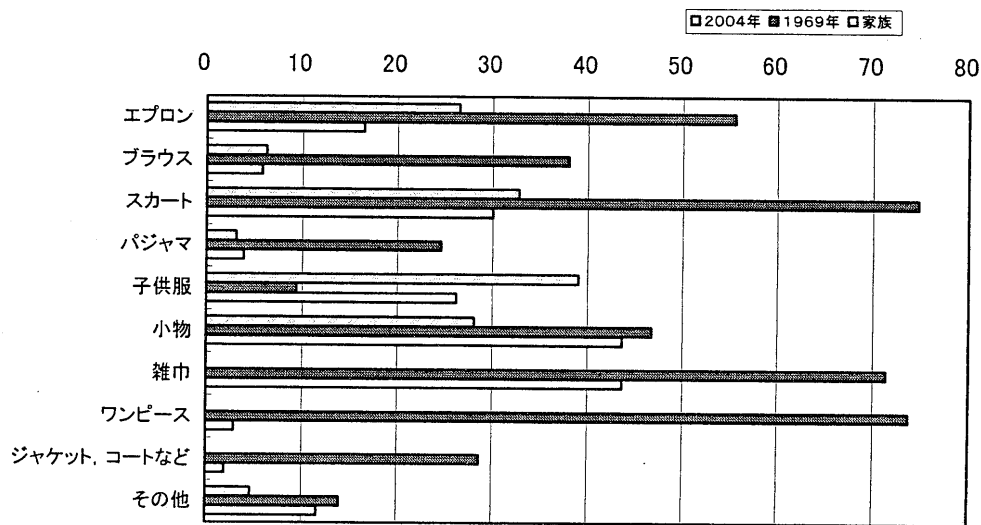


図6 制作物

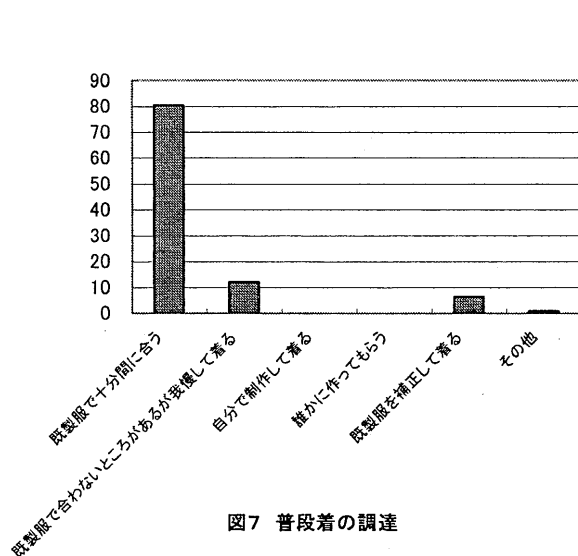


図7 普段着の調達

どのようにしているのかについて示したのが図8である。ボタンがとれた場合は82.4%が自分でつけ直しているが、19.4%が直してもらっている。ほつれ直しは、自分で直すものと直してもらうものが49.1%の同率で、そのままにしておくものも7.4%ある。裾あげは、購入時にズボンの裾など、店ですでに直してもらったものも多いとみられ、75.9%が直してもらっていて、自分で直すものは16.7%に過ぎない。デザイン補正については、自分でするもの、直してもらうものが何れも14.8%、そのままにするが58.3%で、補正してまで着ることはないと言うことのようなのである。

既製服で間に合わせているのがほとんどの現状

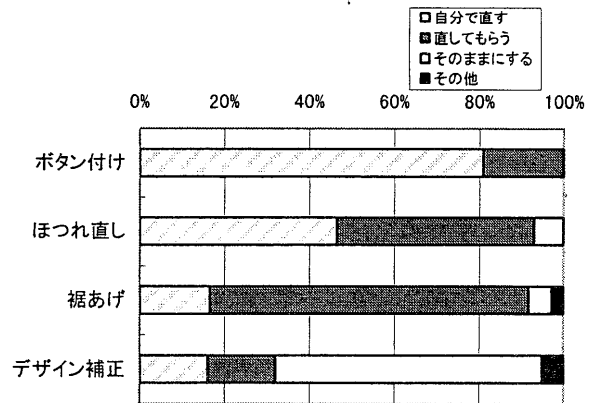


図8 対処方法

であるが、既製服に満足して着ているのであろうか、既製服に不満がある場合についての回答を自由記述で求めたところ図9に示すように、サイズに関することが59.2%で第1位であった。その内容は、ぴったり合うサイズがない、ウエストを合わせると太もも、ヒップが合わないなどであった。次に長さに関することが12.2%であったが、これもサイズに関することとみなせば、ほとんどがぴったりサイズがないとの不満である。次に価格に関することが10.2%で、その内容は、上衣に比して下衣の価格が高い、ブランド品は高いなどであった。素材、縫製、取り扱いなど実用面での不満は低率であった。

次に、普段着についてどのように感じているのかを5段階評価でたずねた結果を図10に示した。最上段には衣服全般についてどう感じているか、

二段目は、収納について、3段目以下は、それぞれの項目について上段に上衣、下段に下衣について示している。さらに、これらを上衣と下衣について項目ごとに平均値をとりプロフィールを描き、重ねて示した。

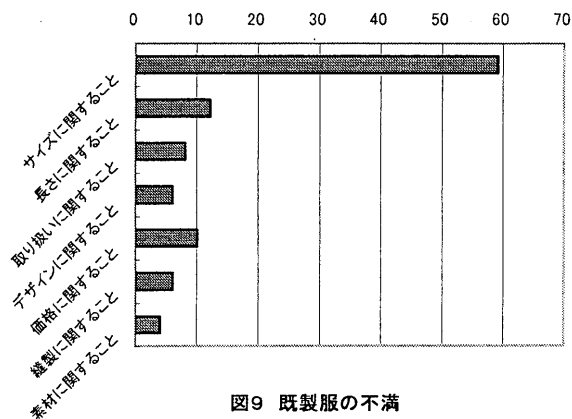


図9 既製服の不満

衣服全般では、約40%がやや満足も含め、満足に思っている。収納については10%程度しか満足しておらず、全項目の中で不満の率が最も高い。デザインについては、上衣は60%以上が満足しているが、下衣は10%程度しか満足しておらず、やや不満の率も大きく上衣と下衣の差が大きい。上衣については市場にはデザイン、サイズも豊富なものが多く、満足できるデザインが選びやすいことも一因しているのではないかとと思われる。フィット感では40%程度が満足に思っているが、上衣の方がやや高率である。付属品、裾上げは、上衣、下衣とも30%程度が満足としているが、付属品は上衣、裾上げは下衣の方が不満の率が高い。仕上げ、素材については、上衣と下衣の満足度は同じような傾向を示し、半数が満足に思っている。

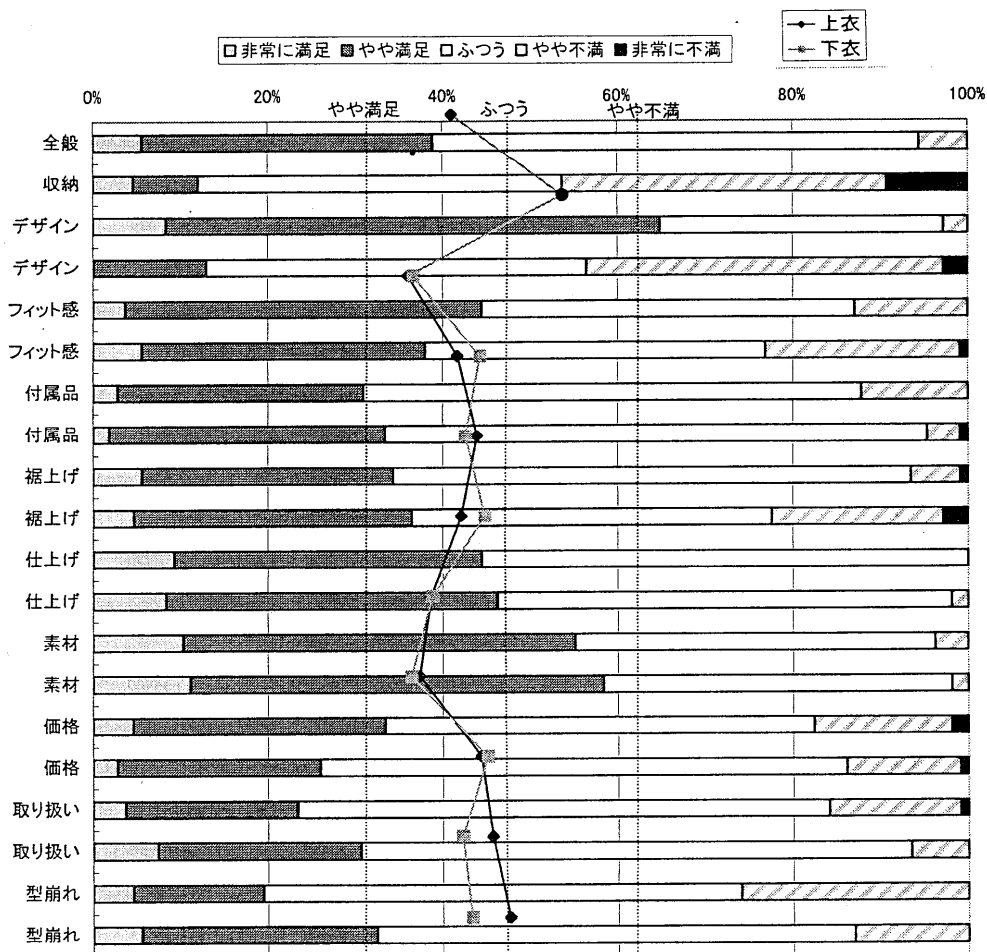


図10 普段着について

価格については、満足、不満足の数ともに上衣の方がやや高率である。取り扱いについては、「ふつう」の率が上衣、下衣ともに項目中最も高率であった。型崩れは、上衣は満足が少なく、不満が多く、下衣は、満足が多く、不満が少ない。下衣はジーパンやパンツをはくことが多いことから、フィット感に対する不満が多く、体にフィットすることが大切なことの表れであり、また、型崩れについては、下衣の方がしっかりした布帛も多いことから、不満の率は少なくなったのではないかとと思われる。上衣は、ファッション性重視のアイテムでもあり、身体に馴染みやすいものや、ドレープ性なども重要視されることなどから型崩れしやすいものも多く、型崩れの不満が多く出たものと思われる。

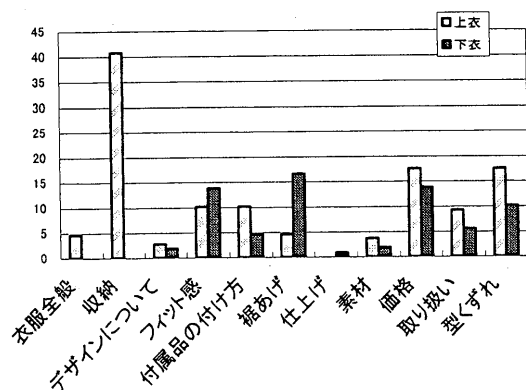


図11 普段着の不満

プロフィールを見ると、収納については低い評価であったが、衣服全般も上衣、下衣ともにそれぞれの項目は、普通よりよい評価で、平均的にはほぼ満足していると考えられる。

衣服全般および収納とそれぞれの項目とに関連があるのかをみるためクロス集計をしたが、何れも高い関連を示す項目はなかった。

それぞれの項目について非常に不満とやや不満と回答したものについて、その理由を自由記述で回答を求めた結果が図 11 である。収納については、収納場所の不足が圧倒的に多く、物があふれているということがわかった。被服全般については、もっと欲しいとの不満理由をあげ、溢れるほど持っているにもかかわらずまだ欲求が満たされないということなのであろうか。項目別にみると上衣、下衣ともにデザインでは、欲しいデザインが少ない、フィット感では部位によってサイズが合わない、裾あげについては、丈が合わない、価格では、高い、取り扱いでは、洗濯に関するもの、型崩れでは、着ているうちに型崩れが起こるなどが主な理由であった。付属品のつけ方では、上衣はボタンがとれやすい、下衣は雑である、洗濯では、上衣、洗濯後の変化、洗濯しにくいものがある、下衣、色落ちなどが主な理由であった。

また、普段着に対する満足感について、どのような関連性が見られるのかクラスター分析した結果を図 12 に示す。取り扱いと型崩れについては、

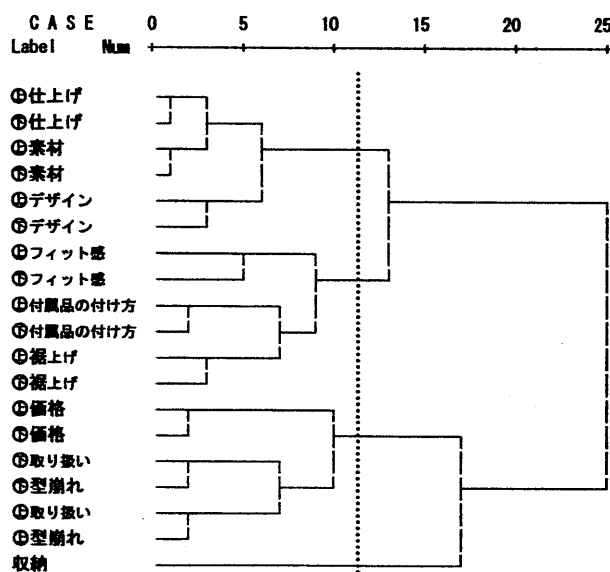


図 12 クラスター

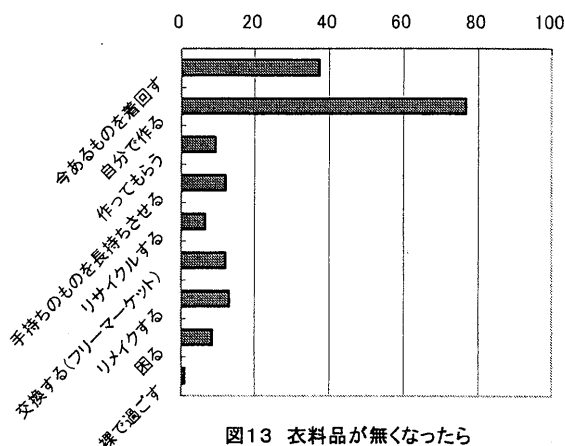


図13 衣料品が無くなったら

上衣、下衣が結合されなかったが、他は、それぞれ上衣、下衣が結合され、感じていることが同じようであることがわかった。全体を見ると、仕上げ、素材、デザインのデザイン性のグループ、フィット感、付属品のつけ方、裾あげの身体依存性のグループ、価格、取り扱い、型崩れの取り扱い性のグループ、収納の四つに分けることができた。

物があふれ、収納に困るほど衣料品を持っている者が多い現状であるが、もしこの世から衣料品がなくなった場合を想定してどうするかを自由回答で求めた結果を図13に示す。自分で作るものが、76.6%で最も多く、次に今あるものを着まわすの37.4%であった。3位以下、リサイクルする、手持ちのものを長持ちさせる、交換する(フリーマーケット)が低率ではあるが続き、物が溢れている手持ちの衣料品でまかなおうとするのが主な理由であった。衣料品は着るものととらえ、布帛までなくなると考えていないものがほとんどであった。しかし、困るとするものが8.4%あり、中には裸で過ごすと言うものもあった。

Tシャツはいくらくらいのものを購入するかについては図14に示すが、千円から5千円が大部分を占め堅実で妥当な価格ではないかと考えられ、今回行ったアンケートの対象者として一般的な生活者の声として考えてもよいのではないかと考える。

4 まとめ

1) ミシンの所有状況は、1969年は100%の所有であったが、2004年は86.1%であった。

2) 1969年には、スカートやワンピースなど

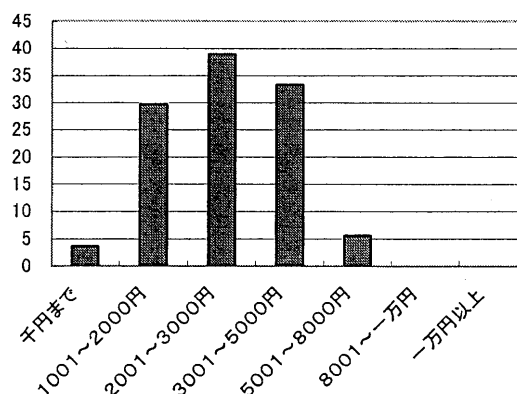


図14 Tシャツの値段

75%近く家庭制作されていたが、2004年では、30%を越えて制作されるものはなく、外部に依存していることが解った。

3) 日常着は80%近くが、既製服で十分間に合っていると回答した。

4) 衣生活で不満に思っているのは収納場所が少ないことであり、物が溢れていることが浮き彫りになった。

5) 市場から衣料品がなくなった場合は、自分で制作するか、今あるものを着回すというものが多かった。

ミシンは所有されているものの使用するものは少なく、着るものは既製服、更に収納しきれないほど物が溢れている現状であった。

地球環境問題が叫ばれ、資源、汚染、ごみ問題などがクローズアップされている現代、ものを大切にし、それぞれに相応しい価値判断で衣生活を送ることは大切なことである。

5 参考文献

- 1) 伊藤五子、鈴木温子、松崎加津：一般家庭におけるミシンの使用状況に関する実態調査、三重短期大学家政学研究会、1970年
- 2) 伊藤五子、村田温子：一般家庭におけるミシンの使用状況に関する実態調査(第2報)、三重短期大学家政学研究会、1971年
- 3) 経済企画庁、内閣府：生活白書